

薬害エイズ裁判和解10周年記念企画

くりかえされる 薬害の原因は何か

第1部 記念講演 デーヴィッド・ヒーリー 「科学の外観をまとったグローバル・ビジネス」 — The Human Laboratory —



「科学的根拠に基づいた医療というのが、臨床試験を行うか否かの決定や市場でどの適応を目指すか、どの雑誌に結果を載せるか、誰をオピニオンリーダーにするかといったことがみな、製薬会社の同じ営業部で決定されていることを我々は認識していない」

自らの著作「抗うつ薬の時代」日本語版への序文で、こう指摘したデーヴィッド・ヒーリーは、英国の精神科医で、現カーディフ大学教授。多数の論文・著作を有する著名な精神薬理学者であり、50代にして現代精神医学史研究の第一人者である。

抗うつ剤SSRIの臨床試験データ等を分析して、同剤が自殺衝動を強めると指摘し、自殺した患者の遺族が製薬企業を訴えた訴訟の原告側証人となった。2000年秋、トロント大学の教授就任講演で、不都合なデータが公表されず、学術論文の多くが製薬企業によってゴースト・ライティングされている現実を痛烈に批判して、同大学から教授就任を断られ、大学・学会と製薬企業との関係をめぐる社会的な論争を巻き起こした“時の人”でもある。

産・官・学の利害構造など、薬害の温床を、圧倒的な事実を背景に、分析する。

- 参加費無料
- 事前申込不要
- 同時通訳付

2006年12月3日(日)

13:00~17:00

ベルサール九段(ホール)

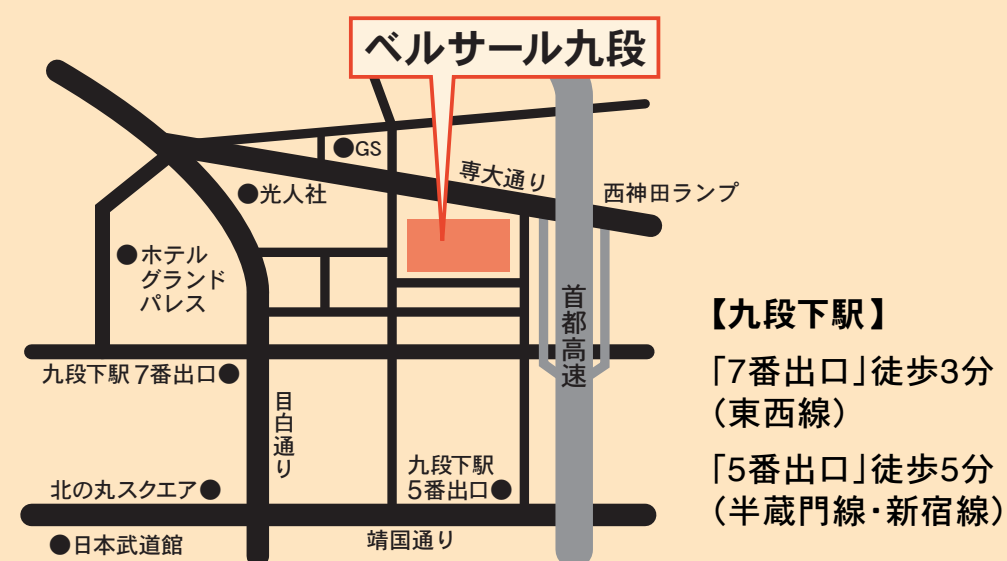
東京都千代田区九段北1-8-10 住友不動産九段ビル3F

第2部 特別報告「薬害肝炎の加害構造」 大阪地裁判決(6月21日)と 福岡地裁判決(8月30日)をもとに

●薬害訴訟の歴史に新たな1頁を加えることとなった薬害肝炎訴訟。国と企業の責任を認めた本年6月21日の大阪地裁判決、8月30日の福岡地裁判決が指摘した薬害加害構造について報告し、東京地裁判決のどこに注目すべきかを解説する。

第3部 シンポジウム 「薬害エイズ事件の教訓と薬害根絶」

●薬害エイズ事件とは何だったのか？ 薬害エイズの和解成立から10年を経て、何が変わり、何が変わっていないのか？ 薬害根絶のための進歩は本当にあったのだろうか？ 薬害エイズ刑事事件を追い続けた弁護士、血友病患者として被害者団体を支えた弁護士、薬害防止活動に取り組んできた弁護士他、東京HIV訴訟弁護団メンバーが本質に切り込む問題提起をする。



共催 東京HIV訴訟弁護団/薬害オンブズパースン会議/医薬品・治療研究会/NPO法人医薬ビジランスセンター(薬のチェック)
問合せ先: 東京HIV訴訟弁護団(すずかけ法律事務所内) Tel 03-3941-2636 Fax 03-3941-2473